

愛知大学版東亜同文書院大学編纂

『華語萃編』 初集

——影印・翻刻と総訳——

20世紀初頭に日中の交流促進を期して上海に設立された東亜同文書院。そこで初学者用の中国語教科書として作成された『華語萃編』初集を、1950年代に愛知大学で簡体字や拼音を取り入れて改訂したものを翻刻し、中国語の発音表記と日本語訳、それに注釈を附して新たに刊行する。戦前期の中国語教育と当時の生活文化を伝える貴重な資料である。

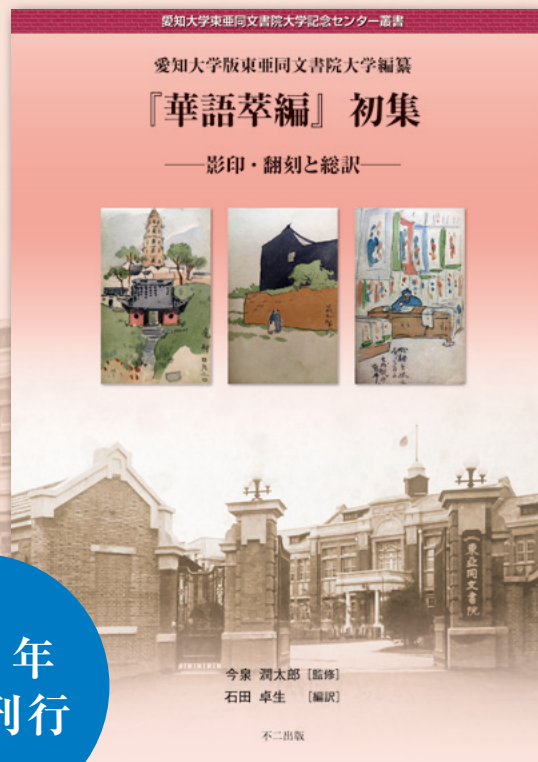
今泉 潤太郎 [監修]

石田 卓生 [編訳]

定価：6,600円(本体6,000円+税10%)

体裁：B5判・上製・400頁

ISBN 978-4-8350-8750-4



2023年
3月刊行

◎推薦のことは

愛知大学名誉教授・地理学
元・愛知大学東亜同文書院大学記念センター長
藤田 佳久

本書は戦前、日本人先覚者たちによって1901年に中国の上海に設立され、日中間の貿易経済人養成を目指し、多くの優れた人材を輩出した国際的ビジネススクール「東亜同文書院」と、さらに中国に関する総合的研究拠点へと発展し帝国大学をも上回る難関校となった「東亜同文書院大学」で使用され、戦後は同大学を引き継いだ愛知大学でも使われた実践的中国語テキスト『華語萃編』初集を新たに翻刻、総訳して刊行したものである。

『華語萃編』初集の初版は大正時代に出たが、その後の時代の変化に対応すべく中国人教員の協力を得て度々改訂をし、戦後も20年近く中国語テキストとして利用され、実に半世紀に及ぶその使命を果たしてきたことは特筆される。

今回、中国語教育研究に従事する石田卓生氏が、日本人向けの本格的なテキストとしての歴史的意義も評価し、その翻刻と翻訳を試み、新たな中国語学習者のためにもわかりやすくまとめ、これまで東亜同文書院大学—愛知大学以外では幻とってよかった中国語テキスト『華語萃編』初集の実像を

明らかにした。

ところで、東亜同文書院生は卒業年次に3カ月前後におよぶ「大旅行」と称する中国本土を中心に満州、東南アジアをもカバーする徒歩中心の貿易品や経済分野の現地調査を行い、その成果は『支那経済全書』全12巻(東亜同文書院、東亜同文会、1907年)、『支那省別全誌』全18巻(東亜同文会支那省別全誌刊行会、1917~1920年)、戦争により9巻で中断した『新修支那省別全誌』(東亜同文会支那省別全誌刊行会、1941~1946)などに結実した。調査先では現地の人々との交渉や交流が不可欠であり、中国語修得はその最大の手段でもあった。そのため、東亜同文書院内では中国語の授業は日本人と中国人の教員がペアを組んで行われ、課外では毎日朝昼晩の3回、上級生による新入生に対する中国語学習会「念書」が行われた。

したがって、このテキストでは、当初の基本語を踏まえ、日常生活から「大旅行」を射程に入れた実践的な会話文が中心となっている。本書では、それらを今日的に修正しつつ、語句の語釈を示しながらわかりやすく訳すことによって中国語学習のテキスト環境を提供している。

ぜひ、この機会にこのテキストによって中国語の世界を味わい、楽しんでもらいたいと期待する。

